

●ウォーミングアップ

1 @ 2点×10=20点

	借 方		貸 方	
	記 号	金 額	記 号	金 額
1	( イ )	495,000③	( エ )	490,000①
	( )		( ア )	5,000②
2	( エ )	450,000④	( イ )	480,000⑥
	( オ )	30,000⑤	( )	
3	( ウ )	270,000⑦	( イ )	315,000⑨
	( カ )	45,000⑧	( )	
4	( ウ )	282,000⑫	( エ )	128,000⑩
	( )		( オ )	154,000⑪

① 500kg×@980円/kg=490,000円

※ @980円/kgは1回しか計算で使いません。

② 引取運賃は外部材料副費です。付随費用です。

③ ①+②

※ 付随費用により、今後の取得単価は@990円/kg (495,000円÷500kg) となります。  
材料費会計の定番論点です。

④ 450kg×予定消費単価@1,000円/kg=450,000円

※ 消費時、予定があれば予定で計算します。予定がないときは、実際に計算します。

⑤ 30kg×予定消費単価@1,000円/kg=30,000円

⑥ ④+⑤

⑦ 300時間×予定消費賃率@900円/時間=270,000円

⑧ 50時間×予定消費賃率@900円/時間=45,000円

⑨ ⑦+⑧

⑩ 160時間×予定配賦率@800円/時間=128,000円

⑪ 140時間×予定配賦率@1,100円/時間=154,000円

⑫ ⑩+⑪

	借 方		貸 方	
	記 号	金 額	記 号	金 額
5	( イ )	900,000①	( ウ )	900,000①
6	( ア )	4,100②	( カ )	4,100②
7	( カ )	400③	( イ )	400③
8	( カ )	4,000⑥	( オ )	5,000④
	( エ )	1,000⑤	( )	
9	( ア )	1,300,000	( エ )	1,300,000
	( オ )	900,000	( イ )	900,000
10	( オ )	300⑦	( カ )	300⑦

① 工場内に製品倉庫があるので、製品勘定を用いて処理します。

※ 本社工場会計の場合で、工場内に製品倉庫がない（製品勘定が設定されていない）場合、（借）本社で処理します。

② 「差異」の計算は予定と実際の差額を求め、実際の方が小さい場合は有利差異です。

予定 予定消費価格@1,000 円/kg×480kg=480,000 円

実際 50kg×@1,004 円/kg+430kg×@990 円/kg=475,900 円

差異 予定 480,000 円－実際 475,900 円＝+4,100（有利差異）

→ 有利差異は貸方差異なので、貸方に原価差異、借方に予定のときの勘定科目を置く。

③ 「差異」の計算は予定と実際の差額を求め、実際の方が大きい場合は不利差異です。

予定 予定消費賃率@900 円/時間×350 時間＝315,000 円

実際 当月支払高 314,000 円－前月末払高 44,300 円＋当月未払高 45,700 円＝315,400 円

差異 予定 315,000 円－実際 315,400 円＝△400（不利差異）

→ 不利差異は借方差異なので、借方に原価差異、貸方に予定のときの勘定科目を置く。

④～⑥ 「差異」の計算は予定と実際の差額を求め、不利差異か有利差異かを判断します。

切削部 予定 160 時間×予定配賦率@800 円/時間＝128,000 円

実際 133,000 円（切削部門費勘定の借方合計）

差異 予定 128,000 円－実際 133,000 円＝△5,000 円（不利差異）

→ 不利差異は借方差異なので、借方に原価差異、貸方に予定のときの勘定科目を置く。

（借）原価差異 5,000④ （貸）切削部門費 5,000④

組立部 予定 140 時間×予定配賦率@1,100 円/時間＝154,000 円

実際 153,000 円（組立部門費勘定の借方合計）

差異 予定 154,000 円－実際 153,000 円＝+1,000 円（有利差異）

→ 有利差異は貸方差異なので、貸方に原価差異、借方に予定のときの勘定科目を置く。

（借）組立部門費 1,000⑤ （貸）原価差異 1,000⑤

原価差異④と⑤を相殺して、（借）原価差異 4,000⑥

⑦ 消費価格差異+4,100 円、賃率差異△400 円、製造間接費配賦差異△4,000 円の合計△300 円（不利差異）

→ 原価差異の借方残高 300 円を、売上原価勘定に振り替えます。これは、300 円高くできてしまったので、売上原価を増やすイメージで処理します。

2 @ 2点×10=20点

	工場の仕訳			
	借方		貸方	
	記号	金額	記号	金額
(1)	( ア )	500,000	( オ )	500,000
(2)	( ウ )	800,000	( オ )	800,000
(3)	( イ )	250,000	( オ )	250,000
(4)	( エ )	400,000	( オ )	400,000
(5)	( オ )	3,500,000	( イ )	3,500,000

問題文および資料のチェックポイント

① 工場内に製品倉庫がある（製品勘定の設定がある）か。

→ (5)

② 特許権使用料や外注加工賃（直接経費）や減価償却費の勘定科目が設定されているか。

→ (3) や (4)

(借) 特許権使用料 250,000 (貸) 本社 250,000

→ 設定がなく、直接経費なので、「仕掛品」で処理します。

(借) 減価償却費 400,000 (貸) 機械装置減価償却累計額 400,000

→ 設定がなく、間接経費なので、 → 設定がなく、支払い（計算）関係は全て本社なので、「製造間接費」で処理します。 「本社」で処理します。

	本社の仕訳			
	借方		貸方	
	記号	金額	記号	金額
(1)	( ス )	500,000	( ケ )	500,000
(2)	( ス )	800,000	( カ )	800,000
(3)	( ス )	250,000	( セ )	250,000
(4)	( ス )	400,000	( ソ )	400,000
(5)	( キ )	3,500,000	( ス )	3,500,000

苦手な人は、工場と本社をひとつにした仕訳をイメージしてみましょう。

3 @ 2点×10=20点

【部門別計算のポイント】

- 1 扱っている金額が「予算」なのか「実際」なのかを確認しましょう。
  - 問1は「予算」です。「予算」は予定配賦率を求めるために計算します。
  - 第1製造部 90,000円÷予定機械稼働時間750時間＝予定配賦率@120円/時間
  - 第2製造部 82,500円÷予定機械稼働時間550時間＝予定配賦率@150円/時間
- 2 扱っている金額や資料が「年間」なのか「月間」なのかを確認しましょう。
  - 資料(1)も(2)も「月次」データです。「÷12か月」が不要です。

問1

費目	合計	製造部門		補助部門	
		第1製造部	第2製造部	修繕部	倉庫部
部門費	172,500	52,000	49,500	39,000	32,000
修繕部費	39,000	18,000	21,000		
倉庫部費	32,000	20,000	12,000		
製造部門費	172,500	90,000	82,500		

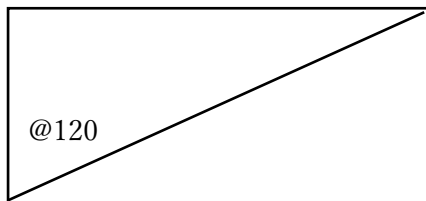
問2

製造間接費－第1製造部			仕掛品		
諸口	89,000	仕掛品 (86,400)①	前月繰越	12,000	製品 (220,000)⑦
予算差異	(1,000)④	操業度差異 (3,600)③	直接材料費	30,000	次月繰越 19,650
	(90,000)	(90,000)	直接労務費	28,000	
			製造間接費－第1製造部	(86,400)①	
			製造間接費－第2製造部	(83,250)②	
				(239,650)	(239,650)
製造間接費－第2製造部					
諸口	84,300	仕掛品 (83,250)②			
操業度差異	(750)⑤	予算差異 (1,800)⑥			
	(85,050)	(85,050)			

- ① 90,000円と記入した人は、上記【部門別計算のポイント】1の「予算」は予定配賦率を求めるために計算しているということを意識できていない人です。予算ではなく「予定配賦額」を計上します。  
 予定配賦率@120円/時間×実際機械稼働時間720時間＝86,400円
  - ② 82,500円と記入した人は、上記【部門別計算のポイント】1の「予算」は予定配賦率を求めるために計算しているということを意識できていない人です。予算ではなく「予定配賦額」を計上します。  
 予定配賦率@150円/時間×実際機械稼働時間550時間＝83,250円
- 予定配賦額と実際発生額との差額より差異を求めるだけでなく、予算差異と操業度差異に分解します。

③・④ 予定配賦額 86,400 円と実際発生額 89,000 円より、差異△2,600 円（不利差異）を求めるだけでなく、操業度差異③と予算差異④に分解（固定予算）します。

【固定予算】

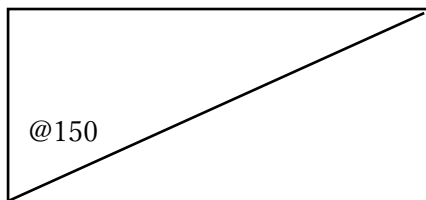


予算 90,000 円－実際 89,000 円  
 = 予算差異④ + 1,000 円（有利）

実 720 時間      基 750 時間      (720 時間－750 時間)×@120  
 = 操業度差異③△3,600（不利）

⑤・⑥ 予定配賦額 83,250 円と実際発生額 84,300 円より、差異△1,050 円（不利差異）を求めるだけでなく、操業度差異⑤と予算差異⑥に分解（固定予算）します。

【固定予算】



予算 82,500 円－実際 84,300 円  
 = 予算差異⑥△1,800 円（不利）

実 555 時間      基 500 時間      (555 時間－500 時間)×@150  
 = 操業度差異⑤ + 750（有利）

⑦ 貸借差額

4 @5 点×4=20 点

【総合原価計算のポイント①】

材料がどの時点で投入されるのか、必ず確認しましょう。特に、2 種類以上あるときは要注意です。

- (1) 始点投入…材料 T → 「数量」で月末仕掛品を計算
- (2) 平均的投入…材料 U → 「加工量」で月末仕掛品を計算
- (3) 定点投入…今回は未出題ですが、以降の問題で出題されます。
  - a ○%時点で投入 → 「数量」で月末仕掛品を計算
  - b 終点投入 → 月末仕掛品の計算は不要

総合原価計算表

(単位：円)

	材 料 T	材 料 U	加 工 費
月 初 仕 掛 品	982,000	(220,000)③	(283,000)②
当 月 投 入	20,020,000	8,080,200	(12,140,400)①
合 計	21,002,000	(8,300,200)④	12,423,400
月 末 仕 掛 品	(2,002,000)⑤	(643,200)⑥	(966,400)⑦
完 成 品	(19,000,000)	(7,657,000)	(11,457,000)

① 40,240,600 円 - 20,020,000 円 - 8,080,200 円 = 12,140,400 円

② 12,423,400 円 - ① = 283,000 円

③ 1,485,000 円 - 982,000 円 - ② = 220,000 円

④ ③ + 8,080,200 円 = 8,300,200 円

⑤ 以下のような BOX を用いて計算します。材料 T は「数量」で月末仕掛品を計算します。

※完成品と月初仕掛品の面積が同じになっていますが、面積と数量に関係はありません。

材料 T (始点投入)

月初 982,000 円 200	完成  3,800
当投 20,020,000 円 4,000	月末 ⑤ 400

→ 「先入先出法」なので、当投 20,020,000 円 × 月末 400 ÷ 当投 4,000 = 2,002,000 円

⑥ 材料 U は「換算量」で月末仕掛品を計算します。

材料 U (平均的投入)

月初 220,000 円 (100)	完成  (3,800)
当投 8,080,200 円 (4,020)	月末 ⑥ (320)

→ 「先入先出法」なので、当投 8,080,200 円 × 月末 (320) ÷ 当投 (4,020) = 643,200 円

⑦ 加工費は「換算量」で月末仕掛品を計算します。

加工費

月初 283,000 円 (100)	完成  (3,800)
当投 12,140,400 円 (4,020)	月末 ⑦ (320)

→ 「先入先出法」なので、当投 12,140,400 円 × 月末 (320) ÷ 当投 (4,020) = 966,400 円

5 @5点×4=20点

**【等級別総合原価計算特有の論点】**

等級別製造原価および製品単価の計算は、以下の手順で求めます。

- (1) 等価係数
- (2) 積数 (等価係数×完成品量)
- (3) 等級別製造原価
- (4) 等級別製品単価

等級別製品	重量	等価係数	完成品量	積数	等級別製造原価	製品単価
X	800g	4	3,500 枚	14,000	(1,400,000)②	(¥400)③
Y	400g	( 2 )	5,000 枚	(10,000)	(1,000,000)	(¥200)
Z	200g	( 1 )	14,000 枚	(14,000)	(1,400,000)	(¥100)
				(38,000)	(3,800,000)①	

① 581,000 円 + 2,178,000 円 + 1,296,000 円 - 255,000 円 = 3,800,000 円

② ① × 14,000 ÷ 38,000 = 1,400,000 円

※ 3,800,000 円 ÷ 38,000 = @100 円/積数を求めた後、@100 円/積数 × 14,000 = 1,400,000 円でも可

③ ② ÷ 3,500 枚 = @400 円/枚

※ 製品単価が同じにならないように計算 (積数ではなく完成品量で除算) しましょう。

6 @4点×5=20点

**【組別総合原価計算特有の論点】**

加工費または製造間接費の配賦は、問題文の指示 (配賦基準) にもとづいて計算します。

組別総合原価計算表

(単位:円)

	X製品		Y製品	
	直接材料費	加工費	直接材料費	加工費
月初仕掛品原価	902,000	258,800	—	—
当月製造費用	4,740,000	3,402,000①	3,090,000	1,848,000②
合計	5,642,000	3,660,800	3,090,000	1,848,000
月末仕掛品原価	1,092,000③	460,800④	—	—
完成品総合原価	4,550,000	3,200,000	3,090,000	1,848,000

① 問題文「加工費は機械作業時間にもとづいて各製品に実際配賦」という指示より、機械作業時間の合計と、加工費の実際配賦率を求めます。

機械作業時間合計 405 時間 + 220 時間 = 625 時間

加工費実際配賦率 5,250,000 円 ÷ 625 時間 = @8,400 円/時間

@8,400 円/時間 × 405 時間 = 3,402,000 円 (5,250,000 円 × 405 時間 ÷ 625 時間でも可)

② @8,400 円/時間 × 220 時間 = 1,848,000 円 (5,250,000 円 × 220 時間 ÷ 625 時間でも可)

③ X製品の直接材料費は「数量」で月末仕掛品を計算します。

X製品: 直接材料費 (始点投入)

月初 902,000円 500	完成 2,500
当投 4,740,000円 2,600	月末 ③ 600

→ 「平均法」なので、合計金額 5,642,000円 × 月末 600 ÷ 合計数量 3,100 = 1,092,000円

④ X製品の加工費は「換算量」で月末仕掛品を計算します。

X製品: 加工費

月初 258,800円 (200)	完成 (2,500)
当投 3,402,000円 (2,660)	月末 ④ (360)

→ 「平均法」なので、合計金額 3,660,800円 × 月末 (360) ÷ 合計換算量 (2,860) = 460,800円

7 @4点×5=20点

【工程別総合原価計算特有の論点】

第1工程完成品の全てが、第2工程に投入されているかを確認しましょう。言い換えると、第1工程完成品の一部が半製品として倉庫に保管される（販売される）場合があります。

	第1工程			第2工程		
	原料費	加工費	合計	前工程費	加工費	合計
月初仕掛品原価	10,000	2,500	12,500	22,500	6,000	28,500
当月製造費用	210,000	106,650	316,650	304,200④	149,000	453,200
合計	220,000	109,150	329,150	326,700	155,000	481,700
差引: 月末仕掛品原価	22,000①	2,950②	24,950	8,450⑤	3,000⑥	11,450
完成品総合原価	198,000	106,200	304,200③	318,250	152,000	470,250

※ 今回は、第1工程完成品が全て③、第2工程に投入されています④。

① 第1工程の原料費は「数量」で月末仕掛品を計算します。

第1工程: 原料費 (始点投入)

月初 10,000 円 2,000	完成  36,000
当投 210,000 円 38,000	月末 ① 4,000

→ 「平均法」なので、合計金額 220,000 円 × 月末 4,000 ÷ 合計数量 40,000 = 22,000 円

② 第1工程の加工費は「換算量」で月末仕掛品を計算します。

第1工程: 加工費

月初 2,500 円 (1,000)	完成  (36,000)
当投 106,650 円 (36,000)	月末 ② (1,000)

→ 「平均法」なので、合計金額 109,150 円 × 月末 (1,000) ÷ 合計換算量 (37,000) = 2,950 円

⑤ 第2工程の前工程費は「数量」で月末仕掛品を計算します。

第2工程: 前工程費 (始点投入)

月初 22,500 円 3,000	完成  38,000
当投 304,200 円 36,000	月末 ⑤ 1,000

→ 「先入先出法」なので、当投 304,200 円 × 月末 1,000 ÷ 当投 36,000 = 8,450 円

⑥ 第2工程の加工費は「換算量」で月末仕掛品を計算します。

第2工程: 加工費

月初 6,000 円 (1,500)	完成  (38,000)
当投 149,000 円 (37,250)	月末 ⑥ (750)

→ 「先入先出法」なので、当投 149,000 円 × 月末 (750) ÷ 当投 (37,250) = 3,000 円

8 @4点×5=20点

【総合原価計算のポイント②】

仕損や減損の発生地点によって、①完成品だけに負担させる（本書では「そのままパターン」と呼ぶ）、②完成品と月末仕掛品の両者に負担させる（本書では「×パターン」）、を必ず確認しましょう。なお、評価額がある場合、①の場合は完成品を計算する前に1回だけ控除、②の場合は、月末仕掛品を計算する前も、完成品を計算する前も控除します。

問1

総合原価計算表 (単位：円)

	原料費	加工費	合計
月初仕掛品原価	3,200,000	1,499,000	4,699,000
当月製造費用	15,040,000	15,147,400	30,187,400
合計	18,240,000	16,646,400	34,886,400
差引：月末仕掛品原価	3,648,000①	1,849,600②	5,497,600
完成品総合原価	14,592,000	14,796,800	29,388,800

① 問題文「正常減損は工程の終点で発生…正常減損費をすべて完成品に負担」より、そのままパターンで処理します。つまり、減損をそのまま残して、当月投入分 6,400 を差額で求めます。

原料費（始点投入）

月初 3,200,000 円 1,600	完成 6,000
当投 15,040,000 円 6,400	減損 400
	月末 ① 1,600

→ 「平均法」なので、合計金額 18,240,000 円 × 月末 1,600 ÷ 合計数量 8,000 = 3,648,000 円

②

加工費

月初 1,499,000 円 (800)	完成 (6,000)
当投 15,147,400 円 (6,400)	減損 (400)
	月末 ② (800)

→ 「平均法」なので、合計金額 16,646,400 円 × 月末 (800) ÷ 合計換算量 (7,200) = 1,849,600 円

問2

月末仕掛品原価 = 5,798,400③ 円

完成品総合原価 = 29,088,000④ 円

- ③ 問題文「正常減損は工程の途中で発生…度外視法による場合」より、×パターンで処理します。つまり、減損を×して、当月投入分 6,000 を差額で求めます。

原料費 (始点投入)

月初 <b>3,200,000 円</b> 1,600	完成  <b>6,000</b>
当投 <b>15,040,000 円</b> 6,000	減損  <span style="font-size: 2em; color: #ccc;">×</span> <b>400</b>
	月末  ③-1 <b>1,600</b>

→ 「平均法」なので、**合計金額 18,240,000 円** × 月末 1,600 ÷ **合計数量 7,600** = 3,840,000 円

加工費

月初 <b>1,499,000 円</b> (800)	完成  <b>(6,000)</b>
当投 <b>15,147,400 円</b> (6,000)	減損  <span style="font-size: 2em; color: #ccc;">×</span> <b>( ? )</b>
	月末  ③-2 <b>(800)</b>

※ 途中とは、どこで発生したか不明

→ 「平均法」なので、**合計金額 16,646,400 円** × 月末 (800) ÷ **合計換算量 (6,800)** = 1,958,400 円

③-1: 3,840,000 円 + ③-2: 1,958,400 円 = 5,798,400 円

④ 34,886,400 円 (借方合計) - 月末仕掛品 5,798,400 円 = 29,088,000 円